

ドクターからドクターへ。肛門科医の日常診療情報誌

# 肛-net

No.13  
ジ ネット

INTERVIEW

**寝る間も惜しんで磨いた技術と  
思いやりの心で高水準で苦痛のない  
内視鏡検査や日帰り手術を**

**ららぽーと横浜クリニック  
院長 大西 達也 先生**

# 寝る間も惜しんで 磨いた技術と 思いやりの心で 高水準で苦痛のない 内視鏡検査や 日帰り手術を



ららぽーと横浜クリニック  
院長 大西 達也 先生

1997年東京大学医学部卒業。東京大学医学部附属病院での臨床研修後、日立製作所日立総合病院外科にて多数の手術を執刀する。2001年より東京大学医学部附属病院の大腸肛門外科に在籍し、大腸内視鏡検査の指導を行う傍ら、関東地方の数々の拠点病院でホームドクターとして診療を行う。2006年東京大学大学院医学系研究科外科学専攻を卒業後、内視鏡検査と肛門疾患の専門施設である東葛辻仲病院を経て、2007年、ららぽーと横浜クリニックを開業。  
東京大学医学博士、日本外科学会専門医、日本医師会認定産業医、日本医師会認定健康スポーツ医、身体障害者福祉法指定医。

## 医師として特殊な技術を極めたいと 大腸内視鏡検査、肛門診療の 鍛錬に励む

先生が大腸肛門科を専門とされた理由を教えてください。

**大西**：医学部卒業時の進路を決める段階では、専門にしようと考えていた診療科はありませんでした。しいて言えば、この先も減びそうにない『内科』、頭頸部痛の手術の大きさに魅せられた『耳鼻科』、自分自身がアトピー性皮膚炎で患者さんの気持ちがよく分かる『皮膚科』、内科的な手段では治せない病気を手術という最終手段で治せる『外科』、美容整形が夜明けの時代となりつつあった『形成外科』のうち、どれにしようかな、と考えていた程度です。最終的には、「将来の自分がどういう姿であれば嬉しいか」を考えたとき、

医療界の花形的存在になっていたらいなと思い、そのイメージの強かった外科を選びました。

外科医になってまず分かったことは、守備範囲が非常に広いということです。胃腸などの消化器の手術、甲状腺などの内分泌腺の手術、肺などの呼吸器の手術のほか、交通事故などの外傷の手術もあれば、動脈静脈などの血管の手術もありますし、痔などの肛門の手術もあります。その中でも最も多いのは消化器の領域。外科医とは消化器外科医を意味するといっても過言ではないぐらいです。そうしたことから、私も消化器外科医の道に進むことになったわけですが、消化器といっても胃、大腸、小腸、食道、膵臓、肝臓…など多岐にわたります。そこで、「消化器の中でどこを専門にするか」ということになったのですが、そのときだけは迷わず、『大腸肛門科』を選びました。なぜなら、

大腸内視鏡検査と肛門診療に関しては、その質の高さを患者さんに分かってもらえる、技術の高さを患者さんと共通認識できる関係になれると思ったからです。

たとえば、大腸内視鏡検査について言うと、外科医だからと言うだけでは技術的に施行できない検査です。外科医は守備範囲が広いために専門領域以外の仕事もこなし、しかもその質はある程度担保することが可能です。しかしながら、患者さんからみれば自分の担当医の専門性や質の高さは分かりにくいわけです。しかし、大腸内視鏡検査に関してはそうはいきません。鍛錬した医師でなければ、内視鏡を最後まで挿入できなかつたり、無理に挿入して患者さんに痛く辛い思いをさせたり…といった具合になります。一方、鍛錬した医師であれば、あっという間に最後まで挿入して検査が終わってしまうため、検査を受けた患者さんは医師の技術の

高さを実感することができるというわけです。

肛門診療に関しても同様です。痔核、痔瘻、裂孔、直腸脱、膿皮症、直腸瘤などの難病がたくさんありますが、いずれも癌のように命を奪うことがないことから、大腸肛門科を掲げている診療科の医師でさえも軽視しがちです。しかしながら、肛門領域の手術は、術後の症状の消失具合や再発の有無、肛門機能で、鍛錬した医師かどうかを患者さんから実感的に評価されるのです。

**■なるほど。そうしますと、医師になってすぐ、大腸内視鏡検査、肛門診療に関して研鑽を積まれたわけですね。**

**大西：**いいえ。研修医を終えたあと3年間を過ごした日立製作所日立総合病院では、外科医としての腕を磨くことに専念しました。日立製作所日立総合病院はとにかく手術が多く、当時は外科医1人あたりの手術数が日本全国でトップ10に入るほどで、実際に私も、緊急手術を含めてほぼ毎日、術者として手術をしていました。大腸癌や痔はもちろんですが、胃癌、乳癌、食道癌、肺癌、肝臓癌、胆石症、急性虫垂炎などなど、挙げれば限りがないほど多岐にわたり、その数は膨大です。ここで、厳しい教育を受け、外科医の手術手技の心得なるものを学びました。

たとえば、①正しくはさみを持つ ②切る部分によって最適なはさみを選ぶ ③本能的にはさみは正しい刃先の向きで使う ④はさみを大きく開いて切らない ⑤手術中の視線は術野に集中すべし ⑥手術の最大のコツは「動かない」こと ⑦視野が苦しいときほど集中 ⑧手術の巧拙は前準備にあり ⑨手術には急げる部分と急いではいけない部分がある ⑩1つの視野でできることはやっておく…などです。これらの基本手技は今の私にとって、すでに体に染みついた習慣となりました。

こうして日立製作所日立総合病院から東京大学医学部附属病院に戻ってきて以後、本格的に大腸内視鏡検査と肛門診療に力を注ぐようになりました。そんなある日、大腸肛門疾患の専門病院である東葛辻仲病院を見学させていただく機会があったのですが、自分の技術がまだまだ未熟であることを実感しました。

東葛辻仲病院は、大腸内視鏡検査数が

年間16,000件と、日本全国で1位、2位を争うような施設でもあり、肛門診療にも定評があります。そこで見た大腸内視鏡検査の技術の高さに魅せられ、私はその日のうちに非常勤医師になることを希望しました。

大学病院での診療を行いながら、徹夜明けであろうが、とにかく週に1回、東葛辻仲病院に出向き、大腸内視鏡検査と肛門診療を修練しました。大学院卒業後は、東葛辻仲病院に赴任し、そこで週4日、大腸内視鏡検査に明け暮れ、年間1,200～1,300件の検査を実施していたと思います。

### いつも来るショッピングモールの中で専門性が高く質の高い医療を提供したい

**■技術を十分に高められてから、『ららぽーと横浜』にクリニックを開業されたわけですね。なぜこの場所を選ばれたのですか。**

**大西：**開業するときの条件の1つとして、“人通りが多い場所”と考えていました。『ららぽーと横浜』がオープンした当時、これ以上に大きなショッピングモールはほかにオープンしておらず、「ここだ!」と思い、決定しました。実際、オープン当初は、毎日3万人近い方が『ららぽーと横浜』に訪れていたそうです。

**■人通りが多いというのは、集患しやすいからですか。**

**大西：**それもありますが、開業医は地域のマスに働きかけて啓蒙する使命があると考えているからです。医療に関する情報が溢れていますが、一般の方が正しい情報を得ているかといえば、必ずしもそうではないと思います。おしりから血がでていても痛みもないので放置していたところ、いよいよ出血がひどくなったので病院を受診したら大腸癌の末期だった…といったケースが少なからずあるのです。そうならないために、開業医は、人通りの多いところで、マスに向かって、「こういうときは検査を受けましょう」などというように、正しい医療情報を大きな声で叫ぶことが大切だと思います。

また、もう1つの条件として、“身近な場所”と考えていました。ショッピングモールというのは生活必需品を扱っているわけ

で、老若男女を問わず、必ず訪れる場所であり、身近な場所です。こうした身近な場所で、専門性が高く、質の高い医療を提供したいと考えたのです。

**■開業にあたり、不安はなかったのですか。**

**大西：**ありました。いつも来るショッピングモールと、専門性の高い医療機関のコラボレーションが吉とでるか、凶とでるか…、あまり前例がないことですからね。

開業というのは、ある意味、地域の人に、「私は、こういう医療をしたいのです。さて、皆さん、どう思われますか」と問いかけるものだと思います。つまり、自分の医療に対する考えが地域に受け入れられるかどうかなので、もし受け入れられなければ自分自身が否定された気持ちになることは否めず、非常に不安でした。

そのため、広報活動も精力的に行いました。これまでにすでに立ち上げていたブログ『東大医学博士による胃腸科肛門科の最新医療ブログ』(<http://blog.ichoukoumon.com>)のほか、クリニックのホームページ(<http://lala-clinic.jp>)を作成したり、『ららぽーと横浜』の商圏とされている半径10km圏内にはパンフレットやチラシを配布したりしました。そのかいあってか、開業当初から、大腸内視鏡検査は1日少なくとも5件の予約が入りました。

### 高い技術で、正確かつ痛くない優しい検査、治療を提供

**■今では、名医と評判で、口コミで北海道から沖縄まで全国各地から患者さんが集まり、毎日、内視鏡検査を17～20件(年間約6,500件)、痔の日帰り手術を3～4件(年間約1,000件)ほど行っているようですが、これはまさに先生の医療が受け入れられた証拠だと思います。この理由について、先生なりのお考えをお話ください。**

**大西：**寝る間も惜しんで磨いてきた高い技術力によって、正確で、痛くない優しい検査や治療を行っているからだと思います。

たとえば、大腸内視鏡検査は無送気軸保持直線的挿入法で行っています。これは、空気を全く入れずに、内視鏡をほぼ

直線的に大腸の一番奥まで到達させる挿入法で、理論的には究極の大腸内視鏡挿入法といえます。患者さんにとってはお腹が張らず苦痛が非常に少ない方法ですが、医師にとっては非常に習得が難しい方法です。おそらく、その技術を習得するには、最低でも5,000件は経験しないとコツがつかめないでしょう。さらに、この技術に精通しようと思えば、経験以外にも多くの専門的なノウハウが必要ですので、医師の絶え間ない努力無くしては難しいといえます。

さらに、当クリニックでは、国内トップシェアであるオリンパス社の最先端機種の中でも最も軟らかい、すなわち、腸に最も優しい大腸内視鏡検査機器を用いた上で、痛みが少ない検査法(無送気軸保持直線的挿入法)を実施しているわけですから、他院で大腸内視鏡検査を受けたものの、痛みのために盲腸まで到達せず、最後まで検査を受けられなかった患者さんでも、当クリニックでは、2008年10月現在で全症例で、痛みなく盲腸まで内視鏡を到達させ正確な診断をつけることができています。こうしたことの積み重ねが、地域の人の信頼へとつながり、今があるのだと思います。

**■肛門診療に関しても、正確で、痛くない優しい治療を心がけていらっしゃるのですか。**

**大西：**もちろんです。おしりから出血している場合、40歳以上であれば、癌も想定

しておかなければなりません。ほぼ100%痔だと思えるようなときでも、大腸内視鏡検査を行い、癌を否定することが大切だと思います。当クリニックは、大腸内視鏡検査を最も得意としていますので、痔なのかそうでないかは、きちんと診断をつけています。その上で、再発しない、理詰めでない、正しい、綺麗で痛くない治療を提供しています。根治手術であっても、複雑痔瘻、深部痔瘻、直腸脱などでなければ、原則、日帰り手術です。

**■日帰り手術ですと、術後の出血などの合併症に対して不安はありませんか。**

**大西：**痔の手術の合併症は、さまざまな手技を用いて総合的に極力抑えることが可能です。まず、日帰り手術可能な症例かどうかを見極めるのが重要。あとは縫合の仕方を工夫したり、注射療法を併用したり。これまで、日帰りであるが故にトラブルとなったケースは1例もありません。

**■それにしても、大腸内視鏡検査にしる、痔の日帰り手術にしる、1人の医師が行う数としては桁違いに多いように思います。痔の日帰り手術は一般診療のない午後に行われているようですが、大腸内視鏡検査は一般診療と並行して行われていますよね。数をこなす秘訣を教えてください。**

**大西：**検査技術を高めることに尽きます。私自身、検査の時間を短くしようということはありません。正確で、苦痛

がない優しい検査を行うと、検査にかかる時間が短くなるだけです。“苦痛がない＝早い”ということなのだと思います。

ただし、やはり、一般診療と並行して、大腸内視鏡検査を実施していますので、効率よく行う必要はあり、院内の動線を工夫する(写真1)などして、内視鏡検査と次の内視鏡検査のインターバルをできるだけ短くするように心がけています。

**リラックスできる空間、土日・祝日の診察など患者目線で「あったらいいな」のサービスも**

**■院内の動線の工夫というお話がでしたが、開業にあたり、アメニティはどのようなところに配慮されましたか。**

**大西：**デザインそのほかは、全て専門の方にお任せしました。ただ、先ほどお話しした患者さんの動線の工夫や、患者さんがリラックスできる、あるいは恥ずかしい思いをしないですむ空間づくりに関しては、いくつか希望をだしました。

その1つは、大腸内視鏡検査を受ける患者さんのための『特別待合室』(写真2)です。大腸内視鏡検査を受けられる患者さんは、自宅で下剤を飲まれて排便されて来ているので、クリニックに来たときは少し疲れていらっしゃると思います。ですから、せめて、一般診療の患者さんとは違う待合室で、ゆったり過ごして欲しいと考えてつくりました。ここから直接、内視鏡検査



**写真1** 内視鏡検査用ストレッチャールーム

ここでは、内視鏡検査を受ける前の患者さんが待機したり、受けた後の患者さんが休息したりする。右手奥が内視鏡検査室で、検査を終えた患者さんと次に検査を受ける患者さんの入れ替え時間は約1分か。



**写真2** 内視鏡検査患者さん用の特別待合室

リラックスできるような空間づくりを心がけたという。手前にはマッサージチェアなども完備されている。右奥から内視鏡検査用ストレッチャールームに直接入室できる。

用のストレッチャールームに行くことが可能になっています。

そのほかに、診察室は3つありますが、それぞれの機能が異なります(写真3、4)。待合室からみると3部屋とも同じようにみえますが、診察室1(写真4・左)はいわゆる一般的な診察室で、診察室2(写真4・中)はスタッフが下剤の飲み方などを説明する部屋、診察室3(写真4・右)は肛門診療専用の診察室です。

■土日・祝日の診察も、ショッピングのついでに、立ち寄りやすいですから、患者さんの立場からすると嬉しいですね。

大西：クリニックといえども、地域最大にして年中無休のショッピングモール『らぽーと横浜』の一角にあるわけですから、その一員としての役割を果たすべきだと考え、スタッフにはかなり負担がかかっていますが、土日・祝日にも診察を行うことにしました。

また、胃腸科、肛門科だけでなく、内科、皮膚科、アレルギー科の診療も行ってい

ます。ショッピングのついでにちょっと診てもらいたいという患者さんは多く、「ここは胃腸科、肛門科専門ですから、風邪は診ません」というのでは、公共性に欠けると考えているからです。ただ、大腸内視鏡検査と並行して、一般診療を行っているため、風邪でちょっとだけ診て欲しいと

いった方を30分も40分も待たせてしまうことがあり、心苦しく思っています。

スタッフの負担の軽減、一般診療の患者さんの待ち時間対策は今後の課題ですね(笑)。

■貴重なお話をありがとうございました。



写真3 一般待合室とそこからみた診察室

一般待合室に置かれてあるソファは特別注文。1人1人のスペースが広く設けられている(そのために、椅子に座れる人数が限られており、最近は丸椅子で対応するはめになっているとか)。診察室は3つあり、どれも同じに見えるが、中の機能がまったく異なることに驚かされる。



写真4

- 左・診察室1  
一般診察室
- 中・診察室2  
カウンセリングルーム
- 右・診察室3  
肛門診療専用診察室



写真5 大腸内視鏡検査中の大西先生

外科医の手術手技の心得の1つである「手術中の視線は術野に集中」のごとく、検査中は視線をモニターから絶対に外さない。



写真6 大腸内視鏡検査後、患者さんに説明する大西先生

検査結果を説明するときは、患者さんの目を見て、きちんと話す。「人として当たり前のことを、当たり前にする」のも大西流だ。

## HOSPITAL DATA



### ららぽーと横浜クリニック

〒224-0053

神奈川県横浜市都筑区池辺町4035-1

TEL : 045-929-5082

<http://lala-clinic.jp>

診療科目：胃腸科・肛門科・内科・皮膚科・アレルギー科

診察時間：9:00~13:00

17:00~19:00 (土日・祝日は14:00~17:00)

休診日：火曜日

企画・発行：株式会社 **インターサイエンス社**

提 供： **インテンディス株式会社**

2008年10月発行  
NPC-O040-0810